照準書
明治十年七月ヨリ
仝十二年七月マテ
照準書
明治十年七月ヨリ仝十二年七月マテ
129

照準書
明治十年七月ヨリ
仝十二年七月マデ
東京帝國大學庶務課
部門
35
五十年史料
129

明治十年七月ヨリ十二年七月マテ

照準書

第二百三十

明治五年調

全國人口總計

男千六百七十八万六千九百貳拾人

女千六百三十万六千貳百九拾貳人

合三千三百九万三千貳百拾貳人

男ヨリ女ノ少キ了四拾八万六百貳拾八人

右戸籍寮調

日本帝國文部卿某貴下及東京開成學校長某
貴下ト何國人某貴下ト取結フ條約左ノ如シ

第一條

一何国人某貴下ヲ何處何學校何數學教授トシ
テ何年何月幾日ヨリ明治八年三月一日マテ
向一ヶ年間相雇候事

第二条

一貴下雇中宿料トシテ一ヶ月ニ付日本金貨三
拾円ト定メ毎月末ニ相渡スベキ事
但食料奴僕等ハ一切貴下ノ自辧タルベキ
事

第三条

一貴下給料ハ一ヶ月ニ付日本金貨何百円ト定

メ毎月末ニ相渡スベキ事
但時ニ因リ各種ノ貨幣ヲ渡ストキハ金貨ヲ元ニ立テ渡スヘキ事

第四條

一學校ノ諸規則授業時間及ヒ順序等ヲ定ムルノ權ハ其學校長ニアルベシ授業ハ一日何時間ト相定メ候事

第五條

一貴下建議ノ件々ハ都テ學校長某貴下教頭ダビット、モルレー貴下ト談判ニ及ヒソノ決定ハ文部省ノ指令ヲ受クベキ事
但文部省ヘノ往復ハ一切學校長ヲ經テ爲スベキ事

第六條

一雇中一切商賣ノ筋ニ關係スベカラザル事

第七條

一日本文部省ヨリ定ムル休日ノ外貴下随意ニ業ヲ癈スル時ハ其日數ノ給料引去ルベキ事

第八條

一雇滿期ノ後尚引續雇入ルヽ時ハ期限以前ニ其事ヲ示スベキ事

第九條

一雇期限中日本文部省ニ於テ不得止ノ事件有リ雇ヲ止ムル時ハ其翌日ヨリ後何ケ月分ノ給料相渡スベシ貴下止ムヲ得サルノ事件アリテ自ラ解約ヲ請フ時ハ其翌日ヨリ給料相

渡サヽル事
但日本文部省ニ於テ雇ヲ止ムルトキハ期限一ケ月又ハ二ケ月ナルトキハ其日数丈ノ給料相渡スベキ事

第十條

一貴下其職ニ任ヘサルカ或ハ懶惰過失有之時ハ期限中ト雖モ雇ヲ止メ其翌日ヨリ給料相渡サヾル事

第十一條

一期限中貴下病ニ罹リ十日ヲ過ルトキハ貴下自費ヲ以テ相当ノ代人ヲ出スベシ二ケ月ヲ経テ猶愈サレハ此條約ヲ廃シ其翌日ヨリ給料相渡サヾルベキ事

但急症ノ病死或ハ變故アル節ハ直ニ在留ノ領事ニ引渡シ其翌日ヨリ雇ヲ止メ給料相渡サヾルベキ事

明治七年何月

文部省長官

開成學校長

某

米國人パーソン数学理学教師トシテ本省ヨリ御注文之
儀當校ヨリモルレーヘ談判可致旨追而御達之有モルレー
氏ヘ及談判候処條約済之通ニテ御雇入来年迄同人
給料ハ一ヶ月大約三百円ニテ御雇入可相成筈ニ付同人学
力他之教師ニ比較致候得ハ給料一ヶ月金三百三拾弗
ニテ相当之旨モルレーヨリモ申出候間右ニテ即今注
文可致然ル処同人旅費金四百五拾弗御渡相成候様
致度此段迅速御指令相成度候也

明治七年二月十九日

開成学校

辻新次

木戸文部卿殿

此条約書ハ二枚ニ認ムベシ一枚ハ学校ニ置キ一枚ハ教師ニ渡スベシ

日本帝國文部卿某ト及何學校學校長某某某ノ條約日本政府ニ代リテ文部卿某及何學校學校長某何國ノ某ト之レニ因テ一致條約スル左ノ如シ

第一條

一某ヲ日本到着ノ日即チ何年何月何日ヨリ何箇月間第何大學區何場何学教師トシテ相雇候事

専門科ヲ雇フトキハアツポインテツトプロフエツソルラフ何ト認メ語学教師ノ時ハエンゲーヂドチーチヤルラフ何ト認ム可シ日本在留ノ教師ヲ雇フ時ハ「日本到着ノ日即チ」ノ文ヲ消スベシ

第二條

一某給料ハ日本到着ノ日ヨリ一ヶ月ニ付日本金貨何圓月末ニ渡スベシ時ニ因リ他ノ紙幣ヲ以テ渡ス時ハ其金高同一ノモノヲ渡ス可シ

（日本在留ノ教師ヲ雇フ時ハ「日本到着ノ日ヨリ」ノ文ヲ消スルヘシ）

第三條

一某奉職中居家一宇相貸ニテ貸渡ス可シ破損スル時ハ日本政府ニテ脩理ヲ加フ可キ事

但食料家具奴僕厩等ハ一切某ノ自費タル可キ事（教師自ラ家ヲ所持スル時ハ此ヶ条ヲ廢スヘシ）

第四條

一某日本ヘ発程前旅費トシテ金貨或ハ同高ノモノ何圓相渡シ満期雇ヲ止ムル時ハ歸程旅費トシテ何円相渡ス可シ

（日本在留教師ヲ雇フ時ハ此ヶ条ヲ廢ス）

第五條

一某職ヲ奉スル信実ニシテ勉リ力ヲ尽シ此条約期限中ハ商賣ノ筋ニ関係セス校中ノ習慣諸規則ヲ奉順ス可シ又此条約ヨリ起ル事件ハ學校長某并ニ何某ト談判ス可シ文部省ヘノ往復ハ一切學校長并何々ヲ経テ為ス可シ

第六條

一日本政府ニ於テ不得止ノ事件アリテ雇期限前ニ此雇ヲ止ムル時ハ其日ヨリ後何ヶ月ノ給料并ニ歸程旅費ヲ渡ス可シ

但シ此ノ如クシテ雇ヲ止ル時期限前何々

月ノ内ナル時ハ其日數丈ノ給料幷歸程旅費ヲ渡ス可シ

第七條

一某止ムヲ得サルノ事件アリテ自ラ解約ヲ請フ時或ハ此條約ヲ破リ或ハ不行状ノ故ヲ以テ雇ヲ止メラルヽ時ハ其日ヨリ給料ヲ渡サス歸程旅費モ渡サヽル可シ

日本在留ノ者ヲ雇フ時ハ歸程旅費以下ヲ消スヘシ

第八條

一某病ニ罹リ奉職シ難キ時ハ日本政府ヨリ書面ヲ以テ雇ヲ止ムベシ給料ハ其日ヨリ渡サズト雖モ歸程旅費ハ前条書載之通リ渡ス可シ

但シ病ニ罹リテヨリ十日ノ内ナレバ二ケ月間相當ノ代人ヲ出スヲ得ヘシ 日本云々前ニ同シ

第九條

一此條約人ノ雙方何レニテモ雇續ヲ請フトキハ期限前少クモ何ケ月ニ書面ヲ以テス可シ

此證トシテ自ラ名ヲ書シ調印スルモノ也

東京ニ於テ　　文部卿某印

何年何月何日　　學校長某印

何所ニ於テ　　證　某　印

何年何月何日

東京在留ノ教師ナレバ「何所ニ於テ何年何月何日」ヲ省ル可シ

第一大學區東京開成學校規則

第一章　通則

第一條　此学校ハ外国諸教授ヲ招傭シ彼国諸學科ヲ教授スル専門学校ニシテ天下万民普ク入テ志願ノ學科ヲ學ヒ得ル所ナリ

第二條　専門諸学科ノ数ハ漸次増設スト虽氏今其設ケ七アリ即法學理学諸藝学鑛山学工業学天文學製作学ナリ

第三條　方今此専門學科ノ中法學理学工業学ハ英語諸藝学天文学ハ佛語鑛山学ハ獨乙語諸製作学ハ國語ヲ以テ教授スル者トス

第四條　此學校ニ入ル生徒ハ外国語学下等教科ヲ経タル學力アル者ニシテ其年齢凡ソ十

六歳以上トス

但製作學生徒ハ此限ニアラス

第五條　各專門學科ニ從ヒ学期ヲ定メ之ヲ別チ預科本科トス則チ左ノ如シ

學校	學期	預科	本科
法學校	學期六年	預科三年	本科三年
理學校	學期七年	預科三年	本科四年
諸藝學校	學期七年	預科四年	本科三年
鑛山學校	學期六年	預科三年	本科三年
工業學校	學期六年	預科三年	本科三年
天文學教場	學期六年	預科三年	本科三年
製作學教場	學期四年	預科二年	本科二年

第六條　預科ハ本科ニ入ルノ階梯ニシテ之ヲ卒業スル者ニ非スンハ本科ニ入ルヲ得ス

第七條　本科ハ主トシテ專門ノ科目ヲ學ハシムル之ヲ卒業スル者ニハ全科卒業ノ証書ヲ與フ

第八條　各學科每級二十五人ヨリ多カラサルヲ法トス

第九條　此校ノ生徒ハ官費生ト自費生ト合算シ凡ソ千員ヲ入學セシムルヲ以テ後來ノ目的トス

第十條　官費生ハ渾テ官費生規則ヲ循守スルヲ要ス方今此学校ニ於テ官費生ノ員數ヲ定ムル左ノ如シ

法學生	五十人
理學生	八十人

諸藝學生　百人
鑛山學生　八十人
工業學生　百人
天文學生　三十人

第十一條　官費生多クハ外国語学校官費生徒ヨリ之ヲ選フト雖モ自費生モ亦官費生規則ニ従ヒ願ヒニ因リ官費生タルヲ得

第十二條　官費生ハ學期中入舎スルモノトスト雖モ事故アリテ止ムヲ得サル者ハ願ヒニ因リ通學ヲ許ス事アルヘシ

第十三條　自費生ハ素ヨリ随意ニ入舎スル事ヲ得ヘシト雖モ舎室ニ定數アリ空室アルニ非レハ入舎スルヲ得ス

第十四條　此學校ハ啻ニ洋風ナルノミナラス授業及ヒ体操等ノ便利ナルカ為メ可成丈洋服ヲ着スヘシ

第二章　入學順次

第一條　入學ハ毎歳両度ニシテ定期試業ノ後トス

第二條　入學期日弁生徒ノ員数ハ前以テ報告スヘシ

第三條　入學ヲ願フ者ハ其当日午前第八時保証人ト共ニ参校シ外国語學下等教科若クハ全科卒業ノ証書ヲ以申出ツヘシ

第四條　外国語學校ヲ経サル生徒ハ従来勤学ノ履歴書ヲ以テ申出ツヘシ

學科履歴式

何府縣貫属華士族僧侶平民

何郡何所或ハ何町村住某 長男二男或ハ弟等

姓名

何學志願

当何年何月

何年何月於何地何学校教員誰ニ就キ英佛獨語學起業用書何々何年間修業 事故アリテ中途轉学或ハ廢学スル者ハ其次第ヲ詳記スヘシ

右之通御坐候也

年号月日

第五條 入學ヲ願フ者ハ先ツ医員ノ診察ヲ経次ニ專門科教授ヲシテ其學力ヲ試験セシム

第六條 入學ノ允許ヲ得ル者ハ左式ニ依テ直チニ証書ヲ出スヘシ

証書式

今般入學御差免相成候上ハ御校則規則堅ク相守可申ハ勿論法学、理学、諸藝学、鑛山学、工業学、天文学、製作学、科卒業ニ至ル迄猥リニ退学或ハ轉学等決テ仕間鋪候依テ証書如斯候也

何府縣貫属華士族僧侶平民

何郡何所或ハ何町村住某 長男二男或ハ弟等

年号月日

姓名印

第一大學區
東京開成学校
御中

右之通相違無之候尤在學中一切之事件ハ私引請可申候為証與印如斯候也

本管属族
証人　姓名　印

第七條　証書式終ラハ本人及ヒ保証人ヲシテ學校長監事ニ面謁セシメ当校規則一部ヲ附與スヘシ

第八條　再入学ヲ願出ル者ハ従前退学ノ事故ニヨリテ差許ス丁アルヘシ

第三章　試業規則

第一條　生徒ハ諸學科ニ於テ必ス其等級順序ヲ踏マサルヘカラス故ニ毎級試業ヲ為シ以テ優劣ヲ判シ進退ヲ定ム其定期ハ各學半歳ノ終リトス

但シ本科預科生共ニ試業ヲ加フト雖モ本科生ノ等級進退ハ各学一歳ノ終リトス

第二條　試業ニ二アリ一ハ定期試業一ハ尋常試業

第三條　定期試業ハ毎歳七月十二月ノ両度トシ試業員ヲ招キ試業セシム

第四條　尋常試業ハ毎月一度若シクハ二度其科ノ教授自ラ生徒ヲ試問シ其優劣ヲ簿記シ定期試業ノ時之ヲ算合スヘシ

第五條　定期試業ノ時ハ預メ其期日ヲ公布スヘシ

第六條　試業臨席ノ官員ハ學校長監事及ヒ其科ノ教授トスヘシ

但シ請求ニヨリテハ他官員或ハ父母親類一般諸人ト雖モ臨席ヲ許スヘシ

第七條　定期試業ノ時生徒格別優等ノ者ニハ褒賞ヲ與フ

第八條　定期試業ノ後生徒學力ノ進否一覧表ヲ作リ以テ之ヲ公布スヘシ

第四章　學歳

第一條　學歳ハ九月一日ニ始リ翌年七月十五日ニ終ル

第二條　前半歳ハ九月一日ヨリ翌年二月二十八日閏年ハ廿九日ニ至リ後半歳ハ三月一日ヨリ七月十五日ニ至ル

第三條　夏半期ハ五月一日ニ起リ十月三十一日ニ終ル冬半期ハ十一月一日ニ起リ翌年四月三十日ニ終ル

第五章　學課定則

第一條　授業時間夏分ハ七時ヨリ十二時ニ至リ冬分ハ八時ヨリ十二時ニ至リ一時半ヨリ二時半ニ至ル

但シ課目表ハ別冊アリ

第二條　反譯ハ副課ノ時ニ於テ一時間ヲ常トス其譯稿ハ毎土曜日之ヲ出スヘシ

但反譯課ヲ置モノハ生徒他日學科卒業ノ
上著撰譯述ニ暗キヿ勿ラシメン為ナリ
第三條　体操ハ休憩時間ニ施行シ其時間ハ一
時ヨリ多カラサルヘシ
但シ体操ハ休憩時間ニ行フト雖𪜈尋常遊
戯ト視倣スヘカラス生徒健康ヲ保チ多年
ノ在校勤學ヲ全シ人々卒業ニ至ラシムル
ノ功用ニ於テ益スル者トス

第六章　休暇定日

第一條　年中休日ヲ定ムル左ノ如シ
各月一日　但一日日曜日ニ当レハ十一日ヲ以テ之ニ充ツ
日曜日
皇国祝祭定日
夏日休業　自七月十六日至八月三十一日
冬日休業　自十二月廿五日至翌年一月八日
第二條　臨時休業ノ節ハ時々之ヲ掲示スヘシ
第三條　夏冬休業中ハ學校ヲ閉鎖スルヲ法ト
ス故ニ開校ハ九月一日及ヒ一月八日閉校ハ
七月十五日及ヒ十二月廿五日ナリ

第七章　書籍器械

第一條　書器借用ヲ願フ者ハ書籍局ニ於テ許
紙ヲ徴シ監事ノ撿印ヲ経テ請取スヘシ
第二條　書籍器械定期試業ノ後チ一度返納シ
改濟ノ上再ヒ借用スルヲ法トス
但シ紛失破毀等アルトキハ相当ノ代價ヲ
納ムヘシ

第三條　縦覧室ヲ設ケ科外ノ書籍学術ノ新聞及ヒ和漢書類雑誌等ヲ備フ故ニ校内ニ於テ小説稗史ヲ閲スルヲ許サス

第四條　休日及ヒ休課時間ニハ諸書ノ縦覧ヲ得ルト虽氏室外ヘ之レヲ携フヲ許サス

第八章　罰則

第一條　校則ヲ犯シ儀禮ニ戻ル生徒ヲ懲戒スルニ左ノ法ヲ以テス

一　禁足寫字　　逗校寫字

二　校中洒掃　　逗校洒掃

第二條　犯戻ノ軽重ニ従テ懲戒ノ日数ヲ議定ス其罪甚シキ者ハ放校ヲ命シ其貫属姓名所行等本省ノ報告雑誌ニ刊行スヘシ

第三條　凡ソ懲戒ヲ被ル者ハ正課及ヒ体操ニ出ルヲ得ト虽氏外出ハ勿論来客ニ面會スルヲ許サス

第九章　禁制

第一條　凡ソ學生ノ風俗ニ関シ礼儀ニ戻リ学校ノ景况ニ係リ規則ニ背リ所業等ハ一切之ヲ禁ス苟モ専門学校ノ生徒ト称スル者殊ニ躬ラ之ヲ察シ宜ク身ヲ脩ムヘシ

開成學校規則附録入舎生心得

第一條
各級中交番ヲ以テ一員ツヽ當直ヲ設ケ其日級中ノ事務ヲ取扱フヘシ

第二條
各室内不潔ニシテ整置ナラサル片ハ当直ノ責ノタルヘシ

第三條
生徒年齢十七年以下ハ當直ヲ除スヘシ

第四條
隔土曜日夕餐後三時間生徒會議ヲ設ケ級長及ヒ外一員出席シ級中ノ意見ヲ代議セシム

第五條

各級中學業最モ先進ナル者ヲ名ケテ級長ト云フ其名ヲ荷フ者ハ特ニ面目ノ事トス

但シ級長ハ当直ヲ除スヘシ

第六條

級長ハ其級生徒ノ教場出入ヲ指揮シ外国及ヒ我教員ニ對シ詞礼ヲ代唱スヘシ

但シ級長欠席等アル片ハ次員之ニ代ルヘシ

第七條

日課時限ヲ規正スルハ生徒ヲシテ健康ヲ保チ業ヲ成サシムル基本ナルカ故ニ掲クル日課表ヲ固守シ須臾モ之ヲ忽ニスヘカラス

ス

但シ已ヲ得サル事故アリテ滞留ヲ願フ者ハ差許スコトアルヘシ

開成學校生徒日課表

	夏	冬
	起五月一日終十月三十一日	起十一月一日終四月三十日
晨起	五時	五時半
盥嗽服飾	自五時至五時半	自五時半至六時
副課	自五時半至六時	自六時至七時
朝餐休憩	自六時至六時四十五分	自七時至七時四十五分
就席用意	自六時四十五分至七時	自七時四十五分至八時
正課	自七時至十二時	自八時至十二時
午餐休憩	自十二時至一時	自十二時至一時
副課		自一時半至二時半
正課		自二時半至三時
休憩	自一時至二時	自二時半至三時
副餐	自二時至五時	自三時至五時
休憩	自五時至六時	自五時至六時半
夕餐	自六時至七時	自六時半至七時半
休憩	自七時至七時半	自七時半至八時半
副課	自八時至九時	自八時半至九時半
就眠	第一報九時 第二報九時半	九時半 十時
	休業日	
晨起	七時半	七時
朝餐	自六時半至七時	自七時至八時
晝餐	自十二時至一時	自十二時至一時
夕餐	自六時半至七時	自六時半至七時半
	平日ト同シ	

第五條
各級中學業最モ先進ナル者ヲ名ケテ級長ト云フ其名ヲ荷フ者ハ特ニ面目ノ事トス
但シ級長ハ当直ヲ除スヘシ

第六條
級長ハ其級生徒ノ教場出入ヲ指揮シ外国及ヒ我教員ニ對シ詞礼ヲ代唱スヘシ
但シ級長欠席等アル片ハ次員之ニ代ルヘシ

第七條
日課時限ヲ規正スルハ生徒ヲシテ健康ヲ保チ業ヲ成サシムル基本ナルカ故ニ掲クル日課表ヲ固守シ須臾モ之ヲ忽ニスヘカラス

日課表

第八條
休日ハ晨起点鐘ヨリ就眠第一点鐘マテ月曜日水曜日金曜日ハ午後一時半外出散歩ヲ許ス
但シ校門出入共鑑札ヲ携持スルヲ法トス

第九條
夏冬休業中ハ入舎生一般ニ退校スルヲ法トス
但シ已ヲ得サル事故アリテ滞留ヲ願フ者ハ差許スヿアルヘシ

第十條
外出中急病事故ニ因テ已ムヲ得ス門限ニ後ルヽトキハ其所由ヲ記載セル保証人ノ印証ヲ以テ帰舎スヘシ

第十一條
一等親ノ病変或ハ自宅近火不得已事故等ニ因テ外出ヲ願フ者其事実ヲ糺シ臨時通行鑑札ヲ添與シ差許ス事アルヘシ
但シ帰舎ノ節ハ必ス前章ニ倣ヒ保証人ノ印証ヲ持参スヘシ若シ翌朝正課時間迄ニ帰舎スルアタハサルトキハ直ニ証人ヨリ其旨趣ヲ願出スヘシ
以上二ケ条ハ証人ノ居宅出発ノ時刻ヲ証書ニ附載スヘシ

第十二條
下宿生并外客共猥リニ舎室内ニ通行スルヲ許サス

第十三條
一等親ノ病変或ハ已ヲ得サル儀ニテ下宿帰省セント欲スルトキハ保証人之ヲ詳記シ其管轄府縣ノ添書ヲ以テ願出スヘシ
但シ下宿帰省共多クモ四十日間ヲ出テサルヲ法トス必ス其日数ヲ願書ニ詳載スヘシ

第十四條
下宿帰省後已ムヲ得ス延日ヲ願フモ亦前條

ニ準シ追願書差出スヘシ

第十五條

生徒疾病ノ軽重ニヨリテ校内ノ病室或ハ大病院ニ送リ療養セシムヘシ

第十六條

病室ノ患者ヲ訪フ者ハ親族同僚生ト虽氏医員ノ許可ヲ得ルニアラサレハ病室ニ入ルヲ許サス

第十七條

診察時間ハ午前第七時ヨリ午後第二時ニ至リ調合ハ午前第八時ヨリ午後第二時ニ至ル

第十八條

病氣ニテ欠課スルトキハ先ツ其級当直ニ告ケ医局ニ趣キ証按ヲ得之ヲ監事ニ差出スヘシ

第十九條

舎中附属器具等ヲ破毀スル者ハ相当ノ償金ヲ納ムヘシ

第二十條

生徒校外ニアリテハ必ス帽ヲ頂キ校内ニアリテハ襟巻ヲ用ユヘカラス

第二十一條

常々靴ヲ用ヒ足痛アルニヲラスンハ之ヲ脱ス可ラス

第二十二條

不用ノ靴類ハ臥床ノ下ニ入置ヘシ

第二十三條
生徒所用品ハ悉ク姓名ヲ記附スルヲ要ス
第二十四條
毎日一度ツヽ靴ヲ磨クヲ要ス但シ室内ニ於
テ之ヲ為スヘカラス
第二十五條
室内ニ於テ小使ヲ呼フヘカラス用事アルト
キハ小使部屋入口ニ趣キ命スルヲ得ルト虽
𪜈決シテ門外ノ使用ニ供スヘカラス
第二十六條
就眠点鐘後ハ点火高声スヘカラス
第二十七條
校内ニ郵便箱ヲ設ク通信書状ハ總テ之ニ投
ツヘシ

醫制取調編成ニ付申上

去六月中醫制取調被仰出別冊編成仕候従来醫術之儀ハ右昔ヨリ一定ノ法制無之其弊習深ク人心ニ浸淫シ一時ニ収拾難致殊ニ医師等級診察料等ニ至リテハ医俗トモ目前ノ不便ニ係リ規則ニ堪兼候事情モ有之候得共医師自ラ薬ヲ鬻キ候ヨリ今日百端ノ弊害ヲ醸候ニ付此一事ヲ閣キ候テハ医制ノ要領相立不申依之先ツ三府ニ於テ醫俗ノ事情ヲ斟酌シ診察料ヲ定メ自ラ薬ヲ鬻クヲ禁スル等徐々着手致シ各地方ハ其官員ニ委子便利ノ処分為申出其折ヲ以テ規則ニ照シ逐次施行イタシ以テ後進成学ノ日ヲ期候様有之度尤諸規則中即今難被行モノハ其

條下ニ当分ノ処分ヲ附記致候得共尚実際ニ至リテハ其運用順序一々記載難臨時開申可仕此段附テ申上候也

明治六年十二月廿七日　文部少輔田中不二麿

太政大臣三條實美殿

上申之趣先以テ三府ニ於テ醫俗ノ事情篤ト斟酌ノ上実際障碍無之様徐々着手可致其他各地ノ儀ハ当分可見合事

明治七年三月十二日　太政大臣三條實美印

海軍々醫寮學舎規則

第一條

軍醫寮學舎ハ生徒ヲ教育シテ海軍医官ニ撰挙スルタメニ設ル処ナレハ生徒等能其意ヲ体シ勉励成業ノ上其旨趣ヲ答ルヲ以テ標的トナスヘシ

第二條

生徒ヲ分テ内外トス内生徒ハ官費ヲ以テシ其員ハ二十名ヲ限リ第五條第六條ノ手續ヲ経テ之ヲ入舎セシメ外生徒ハ自費ヲ以テシ其員ハ五十名ヲ限リ第五條ノ手續ヲ経テ其通学ヲ許シ内生徒ニ闕員アレハ期ニ至リ試験ノ上之ヲ補充ス

第三條

内外生徒ヲ許スヘキ年齢ハ十一歳ヨリ二十三歳迄トス而シテ十一歳ヨリ十六歳迄ヲ幼年生徒ト唱ヘ学期七ケ年（予科二ケ年 本科五ケ年）トシ十七歳ヨリ二十三歳迄ヲ壮年生徒ト唱ヘ学期五ケ年（本科）トス

第四條

生徒入舎通学ノ闕員ヲ補フハ毎年四月九月ノ二期ニ於テス故ニ志願ノ者ハ第五條第六條ニ照準シテ出願スヘシ

第五條

入舎通学願書案左ノ如シ

入舎通学願書ニ料紙美濃紙ニツ折ニ通ヲ出スヘシ

何年何月何日何国何郡何地ニ於テ生（父兄住所 当人住所）　何府縣華士族平民カ何官カ何誰長男弟或ハ附籍カ

何　誰（当何年何月）

右ノ者海軍医心願ニ付試験ノ上入舎通学許容被成下候様仕度此段奉願候以上

何年何月

何府縣華士族平民カ何官カ
身元引請人　何　誰　印

海軍々医寮御中

前書ノ通相違無之候也

何府縣印

但身元引受人ハ総テ東京在住或ハ寄留ノ者ニ限ルヘシ尤外生徒ニハ府縣ノ証印ヲ要セス

第六條

入舎試驗ノ條目左ノ如シ

第一體格
第二作字　案文ヲ出シ筆蹟ヲ試ム
第三讀書　国史畧
第四英獨佛ノ内語学
第五算術　加減乗除
以上十一歳ヨリ十六歳マテ

第一體格
第二作文　問題ニ従ヒ案文ヲ作ル
第三國史大略通曉
第四英獨佛学ノ内一科通曉
第五算術　加減乗除ヨリ開方ニ至ル
以上十七歳ヨリ二十三歳マテ

右試驗及第ノ者ニ内生徒ヲ命スル𪜈左ノ誓書ヲ出サシム

誓書案

今般試驗ノ上軍医生徒願ノ通許容相成候ニ付テハ寮中ノ規則堅ク遵奉シ満期成業ノ後ハ誓テ十五ヶ年間奉務勉励仕轉任辭職等希望候儀致間敷仍テ誓書如斯候也

何年何月　何誰印

海軍々醫寮

御中

第七條

試驗ノ節及第セザル者ト虽𪜈學才アリテ他日成業ノ見込アル者ハ評議ノ上卿ニ具陳シ其許

可ヲ得テ入舎セシムルコトモアルヘシ

第八條

他方ニテ修業ノ者試験ノ上入舎ヲ許ストキハ其年齢学業ヲ参考シ幼壮ノ相当ノ生徒ヲ命スヘシ

第九條

内生徒年限中其業ニ堪ヘザルカ他ノ事故アリテ退舎スルカ或ハ軍医奉職ノ年期未満ニシテ辞職スルトキハ其入舎中ノ諸費ヲ返納セシム若シ当人返納スルコト能ハザルトキハ身元引受人ヨリ辨納セシムヘシ

但病死ノモノ或ハ自然病患ニ罹リ学業ニ堪ヘサル者及ヒ勉励スト雖トモ才力乏シク学術進歩セサル者等事実判然タル上ハ退舎セシメ學費ハ返納ニ及ハス

第十條

内生徒ニ闕員アリテ試験ノ上外生徒ヲ以テ之ヲ補充スルトキハ第二條ニ照ス其奉務年間ハ内生トナリシヨリ以後ノ年数ヲ倍算ス譬ヘハ二年間内生徒タレハ奉務四年トシ三年ナレハ六年トスヘシ

但其器ニ当リ他ヨリ抜擢シテ内生徒タラシムルモ此ニ準ス

第十一條

幼年生徒ハ預科學期ヲ二ケ年トシ大試業ヲ経テ本科ニ轉ス其豫科條目左ノ如シ

國史
習字
英国綴字
同 讀法
同 會話
同 文典
作文
地理學
萬國歴史
數學
羅甸學
佛學或ハ獨学
化學概略

理學

第十二條

壯年生徒ハ本科学期ヲ五ヶ年トシ大試業ヲ經テ及第ス其本科條目左ノ如シ

解剖学 局部解剖学 病体解剖学 組織学
生理学
化學 有機化學 無機化学
本草學 植物学 動物学
藥劑學
病理学
内科学
外科学
産科学

保全學

死体撿學

第十三條

大試業ハ預科本科共満期ノ後トシ中試業ハ毎年三月七月トス尤大中試業ニハ軍醫頭並教導掛ノ医監以下列席シ小試業ハ特ニ教導掛医監以下ノ品評ニ任ス

但非常上達ノ者ハ期年前ト雖氏大試業ヲ行ヒ且才能抜群ニシテ後日大成ノ見込アル者ハ外国留学ヲ命スルヿモアルヘシ

第十四條

中試業期或ハ期前ニ於テ二ケ月以上病氣ノ者ハ後期ニ之ヲ行ヒ大試業期ニ病氣ノ者当時ノ評議ニ依リテ之ヲ處分スヘシ

但期前全癒其期ニ試業受度者ハ其志願ニ任スヘシ

第十五條

豫科本科共大試業落第ノ者ハ翌年再試業シ若再試落第ノ者ハ當寮適宜ノ職務ニ採用スルヿモアルヘシ

第十六條

毎年一月十一日ヲ以テ開業トス此日本省並當寮官員出席軍医頭開業ノ式ヲ行次ニ教導掛医官以下ノ内一員醫學ノ一科ヲ講スルヲ例トス

第十七條

定式休業左ノ如シ

御祭日御祝日
但六年第三百四十四号布告ニ因ルヘシ
日曜日
四月一日ヨリ同三十日マテ
八月一日ヨリ九月三十日マテ
十二月廿五日ヨリ翌年一月十日マテ

第十八條
内生徒ヘ毎年給與スル衣服左ノ如シ故ニ受業ノ間他ノ衣服ヲ着スルヲ禁ス
夏服二着 肌着共
冬服一着 肌着共
帽子二箇
靴二足
靴下六足
右ノ外総テ自費タルヘシ

第十九條
外生徒着用ノ衣服ハ受業ノ間ト雖𪜈定制ヲ設ケス
但洋服ニアラサル者ハ必袴ヲ着スヘシ

第二十條
生徒病氣ニテ闕席スル𪜈ハ舎長ヘ届出舎長ヨリ之ヲ教導掛リ医監ヘ申告スヘシ外生徒モ亦之ニ準ス
但内生徒舎中療養届キ難キ病症ノ者アル𪜈ハ当直医官精診ノ上入院療養セシムヘシ

第二十一條

父母看病ノ為メ歸省スル片ハ医案並其管轄府縣ノ証印ヲ以テ当寮ヘ出願スヘシ
但歸省中若シ本人発病日数六十日以上ニ及フ片モ本文ニ準ス

第二十二條

生徒左ノ件々アル片ハ之ヲ本省ニ申達シ卿輔ノ命ヲ以テ之ヲ退舎セシメ第九條ニ照準シテ學費ヲ返納セシムヘシ

第一本寮ノ規則ニ背ク者

第二先進ヲ凌キ後進ヲ侮リ教官ニ對シ無礼ノ者

第三遊蕩放縦ニシテ教戒ヲ加フルモ悛行ヲ改メサル者

第四學業ヲ怠リ中試業ノ落第三度ニ及フ者

第五不摂生シテ病ニ罹リ或ハ自己ノ越度ニ依テ自体不具トナリ學業ニ堪サル者

第二十三條

前條ヨリ軽キ過失ハ其次第ニ依リ寮中ニ於テ十日ヲ限リ左ノ法ヲ以テ之ヲ戒懲ス

第一舎外禁足

第二舎外禁足ノ上舎内掃除

第三別室禁錮

第二十四條

内生徒ニハ書籍ノ貸與ヲ許ス故ニ借覧ヲ欲ル者ハ教導掛舎監以下ノ差圖ヲ受ケ左ノ明細短冊ヲ出スヘシ

但借覧期限二ヶ月ヲ越スヘカラス尤覧了ラサル片ハ更ニ本文ノ手續ヲ以テ再借ヲ請フヘシ

半紙
二ツ切

書名
何年何月
内生徒 姓名

第二十五條

凡生徒官器官籍ヲ故ラニ損傷シ居室戸障ヲ破壊シ自ラ償フ能ハサル片ハ之ヲ身元引受人ヨリ辨納セシムヘシ

東京醫學校

當省所屋外國教師明細表去ル七月分為冊
右廻ニ候也

明治七年十月廿二日

文部省

旅費定則附例 明治九年十月

検査寮

内國ノ部

第一號

第二章第二項

一甲廳ノ官員ヲ乙廳ニ採用甲ノ地出發後途中ニ於テ甲廳廢セラレ乙廳ニ着ノ節元身分取扱ヲ以テ辞令付與スルト雖モ赴任旅費及ヒ拜命前日マテノ滞留日當ハ前官相当ヲ以給スヘシ

第二號

同

一甲廳ノ官員ヲ乙廳エ採用甲地出発乙廳エ着
ノ処既ニ途中ニ於テ乙廳癈セラレ候ニ付空
シク甲廳エ帰来候節往返旅費ハ乙廳癈セラ
ル、ト虽モ同廳経費ノ内ヨリ支給スヘシ

第三號

第十一章

一至急用務有之官馬馬車等乗用ヲ命スル者モ
運テ本章ニ准ス可シ

第四號

第二章第二項

一他方出張或ハ巡回中支廳其他ノ在勤ヲ命セ
ラル、者ハ最初出発ノ廳ヨリ在勤地マテノ
直路里程ニ應シ並旅行日当ト赴任旅費日当
ト差違ノ金額ヲ手當トシテ追給シ又本廳ヨ
リ三里以外ニアル甲地在勤ヲ免シ更ニ乙地
出張ヲ命セラレ御用濟帰廳スル者ハ在勤ノ
地ヨリ本廳マテノ直路里程ヲ算シ前同断差
違ノ金額ヲ手當トシテ加給スヘシ

第五號

第七章第四項

一琉球藩在勤ノ者免職ニ付鹿児島エ帰郷スル
節同所ヘノ便船数日間無之同地滞留中長嵜
ヘノ便船有之ニ付同船ヘ乗組長嵜ヘ巡リ鹿
児島ヘ帰郷スルモノ順路ニハ無之候得共無
余儀次第ニ付右里数通算定則第十七章相当

帰郷旅費ヲ給シ藩地滞留中ハ滞留日當ヲ給ス

但千島國在勤ノ者免職帰郷ノ節海氷等ノ為メ航路梗塞ニテ滞留致シ候節ハ本文同様滞留日当ヲ給スヘシ

第六號

第十七章

一官費生徒招集并帰郷及聘校等ノ節旅費ハ渾テ本章ニ準シ並旅行日当ヲ支給スヘシ

第七號

第二章第二項

一廃縣後事務引渡中各廳ヘ採用ノ節ハ本項ニ准シ第十七章相当ヲ以テ支給スヘシ

第八號

第二章第四項

一片道三里以上六里未満ノ地ヘ往片道晝夜急行該地ニテ一泊或ハ数日滞留帰路並旅行等ノ節往返旅費ハ第十五章ニ准シ支給スヘシ

第九號

第十八章

一上海ヨリ横濱マテノ郵船ニテ歸朝ノ節航海中発病シテ長崎等ヘ上陸シ療養スルモノ滞留中ハ本章ニ准シ内國日当ヲ給シ更ニ該地ヨリ横濱マテノ船賃ハ定則第四章第二項ニ照準悉皆官費給與シ航海日当ハ外国行第一章第二項ニ照准給與スヘシ

第十號

一各地出張及赴任等ニテ九年六月中出発同七月ニ至リ着スルノ類舊新定則ニ跨ル節ハ新定則施行七月一日前後ヲ區別シ里数ニ應ス舊新定則ニ據リ支給スヘシ

但六月三十日マテニ通行シタル里数ヲ計算シテ端里数ヲ生スル節ハ七月一日ノ行程ヲ合算シテ十里ヲ得舊定則ヲ以給スヘシ

一前同様ノ節自己ノ便宜ニ據リ乗船シ渡航中自然六月三十日マテニ陸行線路ノ地ヘ着港シ又ハ上陸ノ上右線路ヘ出ルモノハ前項ニ準據航海中里数ヲ得カタキ𪜈ハ陸路一日十里詰ノ割合ヲ以六月三十日マテニ当ル分ハ舊定則ニ據リ七月一日以後ニ当ル分ハ新定則ヲ以支給スヘシ

一巡回ニテ前同様ノ節里程分明ニテ六月三十日マテ施行ノ分ハ同日マテヲ通算シテ舊定則ニ據リ里程不分明ニテ日ヲ以計フルモノハ七月一日前後ヲ區分シ舊新定則ニ據リ日数ヲ以支給スヘシ

但六月三十日マテ通行シタル里程ヲ通算シテ端里数ヲ生ル𪜈ハ一里以上ヨリ旧定則ヲ以給スヘシ

一免職帰国ニテ前同様ノ節六月三十日マテニ被免候分ハ旧定則ニ據リ七月一日以後ニ被

免候分ハ新定則ヲ以支給スヘシ

外國ノ部

第一號

一外國行ノ者八年六月以前内地発纜七月後ニ至リ外国到着セシ𪜈ハ往路船賃ハ総テ六月已前ノ成規ニ則リ航海日当ハ七月前後ヲ以區分シ之ヲ給ス

但シ歸朝ノ者モ亦同シ

第二號

一外国行ノ者既ニ許可ヲ得テ妻ヲ携帯セシ者ハ帰朝ノ節マテ其旅費ヲ支給スヘシ

但支給ノ方法ハ従前ニ據リ金員ハ今般決定ノ規則ニ據ルヘシ

旅費定則附例　明治九年十一月

検査寮

内國ノ部

第十一號

第十九章

一帰省其他養病中官ノ都合ニ依リ歸廳ヲ命スル者ト雖モ渾テ本章ニ準スヘシ

第十二號

第五章

一滊車ニテ甲ノ地出発乙ノ地ヘ着同地ヨリテ官船ヘ乗組丙ノ地ヘ着御用濟即日前同様歸着スル者ハ往返滊車賃ノ外ニ勅任官ハ官船渡

海日當并滞留日当ヲ給シ奏任以下ハ官船渡海日当賄料ヲ支給スヘシ尤船中官費賄ノ節ハ官船渡海日当ノミヲ給シ滞留日当及賄料ハ給セサルヘシ

第十三号

第十一章

一乗馬ヲ要スル御用ニテ本廳又ハ支廳等ヘ出張シ其事務ヲ了シテ直ニ其所ヘ在勤ヲ命セラレ乗馬及口附ノ者ノミ差返スキハ判任等外ノ別ナク馬飼料及口附ノ者旅費ヲ支給スヘシ

○

正誤　旅費附例外國ノ部第一号八年六月ハ九年六月ノ誤

月俸規則附例　明治九年十一月

撿査寮

第一号

第十二條

一府縣長官在東京又ハ養痾皈省中ニテ免職シ更ニ従前擔当ノ事務引渡ヲ命スルモノハ本條ニ準スヘシ尤支給ノ方法ハ其命ヲ受タル日ヨリ事務引渡濟マテノ日数ヲ計算シ十五日前後ノ區分ヲ以テ支給スヘシ

第二号

第十七條

一在勤或ハ支廳詰ニテ御用濟其地ヲ発足スヘキモノ父母病氣ニ付看護ノ為許可ヲ得テ滞留スル者モ本條ニ準スヘシ

但在勤或ハ支廳詰ノ者御用濟ノ後更ニ皈省ヲ願フ者ハ此限ニ非ス

豫算法附例　明治九年十一月

検査寮

費目ノ部

第一号

一懲役人ノ内妊娠ノ婦女アリテ産婆ヲ雇フ片ハ其給料ハ懲役費ヨリ仕拂ヘシ

但藥價其他ノ入費ハ雇工銭ヲ以テ支辨スヘシ

第二号

一院省使廳本年九月二十六日太政官番外達書ニ據リテ賜ル判任官勉励賞與

右ハ定額常費給與恩賞ノ部ヘ編入スヘシ

一三府本年九月二十六日太政官番外達書ニ據リテ賜ル奏任判任官勉励賞與

一各縣任期例ニ據リテ賜ル奏任判任官勉励賞與

右両項トモ額外常費給與恩賞ノ部ヘ編入ス尤判任ノ分ハ来明治十年七月以後定額常費給與恩賞ノ部ヘ編入スヘシ

但各廳ノ稟議ニ仍リ既ニ指令セシモノト虽トモ本文ニ抵觸スル分ハ更正スヘシ

第三号

一陸軍恩給令ニ據リテ支給スル分ハ額外常費陸軍兵死傷扶助ノ次ニ左ノ如ク大科目ヲ立

ツヘシ

陸軍恩給

但恩給○寡婦扶助料○孤児扶助料○罷役後恩給ノ小科目ヲ設ク

増減費ノ部

第一号

一秩禄ハ豫算決定ノ後死去或ハ除族其他ノ事故アリテ請額ノ増減ヲ生スル𪜈其時々申牒スルニ及ハス會計年度末期ニ至リ過不足決算スヘシ

年度分界ノ部

第一号

一官用地ニ係ル區費各其年度中ヘ勘定仕上ケスルハ當然ナレ𪜈八年度ノ如キハ地租改正ニ際スルヲ以テ該季年内ヘ勘定仕上ケ出来難ク事実已ムヲ得サル分ニ限リ八年度ノ費用ヲ九年度経費中ヨリ支出スヘシ

會第○拾七号

當省消防人足之儀今般更ニ別紙之通リ相定自今失火近火之節ハ速ニ駈付消防方可致旨當局文部省より達置候條此旨為心得及通達置候也

明治十年一月十二日

文部省
會計課

各學校宛

條約書

第一章

文部省近傍出火ノ節ハ何時ニ限ラス人足五拾人引率速ニ駈付指揮ニ從ヒ消防或ハ物品ノ運搬ヲ為サシムヘシ

但東京府内文部省直管諸学校博物館書籍館等ノ近傍ニ出火アル𪜈モ本文同様駈付其場所吏員ノ指揮ニ随ヒ消防等ヲ為サシムヘシ

第二章

人足ハ宿所姓名ヲ記セル鑑札ヲ一名毎ニ附與スヘキヲ以進退アル𪜈ハ書替ヲ請フヘシ

第三章

人足ノ門ヲ入ラントスルトキハ右ノ鑑札ヲ門

番所ニ出シ置キ出ルニ至テ各自ニ受取ルベシ

第四章

人足ハ恒ニ足留賃トシテ一月一名ニ付金三拾戋ヲ給スベシ

第五章

出火ノ時ニ臨ミ人足ノ内不参ノ者アル片ハ過怠トシテ已ニ支給セル足留賃ニ二倍ヲ償ハシムヘシ

第六章

人足一ト度駈附ル片ハ手當トシテ一名ニ付金五戋并辨当或ハ其料金貳戋五厘ヲ給スベシ

第七章

人足六時間以上相詰ル片ハ手当一名ニ付金拾戋ヲ給シ十時間以上ナル片ハ一名ニ付金貳拾戋并再度辨當或ハ其料ヲ給スヘシ

第八章

火掛ヲ為シ或ハ諸物品ヲ運搬シテ格別ノ労アル片ハ時間ニ關ハラス手当金一名ニ付金三拾戋ヲ給シ辨当ハ前章ノ時間ニ准シテ給スベシ

會計部ニ於テ記ス

過誤ノ通知書ヲ以テ置キ其消印人ノ姓名並證札雛形別紙ノ通其条件ヲ書シ又四ニ章ヲ以テ各通ニ付候也

明治十年一月十九日

文部省會計課

各學校宛

表
文部省
消防人足
裏
第何大區何小區
何町何丁目
何番地
何之誰
村上権左衛門
大久保彦兵衛

薬剤監　四等軍醫監同等
陸軍々醫　正七位　七等　陸軍剤官
金七百五拾円　俸給
金四拾五円　宅料
一ヶ月平均　金六拾六円弐拾五銭

陸軍々醫副　従七位　八等　剤官副
金五百拾円　俸給
金三拾六円　宅料
一ヶ月平均　金四拾五円五拾銭

陸軍々醫補　正八位　九等　剤官補
金四百弐拾円　俸給
金三拾円　宅料

一ヶ月平均　金三拾七銭五厘弐

校長代理

監事局
用度課
生徒掛
庶務課
市川寛繁

内務省及陸軍省官費生卒業料卒業
之後当然返納スヘキ筈ニ付別掛ニテ請求方手続
可然哉ニ付此段相伺候也

明治十年四月六日

証書案　用紙証券界紙

私儀

受業料本月ヨリ一ヶ月金五拾戔ツヽ上納可致ノ処書籍購求等ニテ学資金贏餘無之ニ付卒業ノ後上納致度旨相願候処御聞届相成然ル上ハ卒業ノ後無相違上納可致候仍テ証書差出候也

年号月日

本

右之通相違無之候仍テ

父兄

証書案　用紙証券界紙

私儀

受業料本月ヨリ一ヶ月金五拾戋ツヽ上納可致ノ處書籍購求等ニテ学資金贏餘無之ニ付卒業ノ後上納致度旨相願候處御聞届相成然ル上ハ卒業ノ後無相違上納可致候仍テ証書差出候也

年号月日

本管族籍

國郡區村町住

姓名　印

右之通相違無之候仍テ奥印致候也

父兄或ハ証

証書案　用紙証券界紙

私儀
年月ヨリ一ヶ月金五拾戔ツヽ上納可致
精購求等ニテ学資金贏餘無之ニ付卒業
納致度旨相願候処御聞届相成然ル上ハ
後無相違上納可致候仍テ証書差出候也
月日
本管族籍
國郡區村町住
姓名印
相違無之候仍テ奥印致候也
父兄戚ハ証

右之通相違無之候萬一本人
本年放シ之納兼候節ハ私ヨリ
弁償可仕候依テ奥印致

40

本貫族住所

姓名　印

東京醫学校

御中

綜理

庶務課

市川寛繋

教場備品骨格修繕之儀出来候ニ付左之代価ヲ以テ適宜ニ払下可然哉相伺候也

上等接連骨　金三拾五円　金四拾円
金四拾五円　金五拾円

中等同　金三拾円

下等同　金弐拾五円

上等系統　金拾五円

中等同　金拾弐円

下等同　金拾円

頭骨分離開　金七円五拾銭　金五円　金六円

同従横断　金壱円

明治十一年十二月廿五日

綜理

貴院病者本郷附属病院ヘ引移之儀ニ付其旨左之通
及答候

一賄料之儀者養育院月々仕出之代価ヲ別ニ可以
御通之上相談候事

一薬料之儀者一ヶ月壱人金壱円五拾五銭之割ヲ以
御通之上相談候事

一患者衣服之外並其外其他需用費ハ一切本郷ニ而
相弁可申候事

一患者往復之節ハ用人並人足賃者本郷ニ而相弁
可申候事

右之通及答候也

十一年十二月廿日

東京大学医学部印

養育院
御中

患者所局ヘ差廻シ候人名

寅十一月十八日差廻シ済

南小田原町
田代政吉

同十五日差廻シ済

牛込白銀町
白井金蔵

同十八日差廻シ済

山谷浅草町
松山吉太郎

同十九日差廻シ済

豊島町武蔵屋
中村丈五郎

同十六日差廻シ済

谷中上三崎南町
荒井長次郎

上野南大門町

舊加賀邸ニ後来東京大學全部合併ニツキ

醫學部ノ處置

醫學本科ノ課程ヲ五週年トス其學科ヲ大區スレバ左ノ如シ

解剖學

生理學

病理學

藥劑學

内科學

外科學

眼科學

産科學

現今ノ預科生ノ如キハ原来中學ノ學科ニシテ

後来大學ヨリ分カツベキ者ナレバ爰ニ記載セズ亦物理學化學植物學動物學鑛物學及數學ハ諸科ハ従来理學部ニ属スベキ者ナレバ同部ニ於テ新築ノ際其處置アリタシ解部學生理學病理學及藥劑學ノ四科ハ屍体解剖或ハ獸類ニ試驗ヲ施シ或ハ化學的ノ試驗ヲ要スルガユヘニ十全ヲ期スルトキハ此四科ニ向ツテ獨立ノ建築ヲナサザルベカラズ故ニ亦爰ニ記載セズ

内科外科産科眼科ノ如ク臨床講義ヲ要スル諸科ハ別ニ病院ヲ建設セザルベカラズ然レドモ此諸科ニ属スル講義室ハ學校内ニ設ケザルヲ得ズ

學校内ニ講義室ヲ要スル諸科ノ細目ヲ左ニ枚擧ス

普通解剖學	局處解剖學
組織學	胎生學
生理総論	生理各論
藥劑學	病理総論
病理各論	内科學
外科総論	外科各論
外科手術學	繃帯學
眼科	婦人科
小児科	診断學
耳科	齒科
皮膚病	梅毒

咽喉科	中毒學
醫科地理誌	醫科歴史
瘋癲科	断訟医學
衛生學	

右ノ諸科中獨立學校又ハ醫院中ニテ講義スベキ者モ少ナカラズ然レ𪜈大約預備室共ニテ十二箇ノ講義室ヲ要スベシ

現今ノ本科生ハ一級六十名ヲ限リトスレ𪜈後来一級百五十名ヨリ少ナカラザルヲ期ス

大學事務室講義室及書籍室博物室等ノ如キ都テ四學部普通ノ者ハ別ニ記載セス

左ニ単ニ醫學部ニ要スル所ノ席室ヲ掲載スベシ

室名	數	摘要
醫學諸科講義室	十二	生徒百五十名ヲ入ル、席トス
會議室	一	縦六十尺 横四十二尺
應接室	一	縦二十四尺 横三十尺
教授私室	二	縦二十四尺 横三十尺
事務室	一	縦二十四尺 横十八尺
生徒扣室	一	縦四十二尺 横三十六尺
講義用書籍室	一	縦三十六尺 横四十二尺
仝器械室	一	縦二十四尺 横十八尺
校僕室	一	縦二十四尺 横十八尺
宿直室	一	縦十五尺 横十八尺

加賀邸内ニ東京大學建設之事

加賀邸内ニ東京大學建設ノ事

第一　大學校ノ處置

醫學部ハ既ニ其建設アリテ備ハルカ故ニ之ヲ除キ三學部ニ就テ處置スルヲ要ス

法學部　文學部　理学部

各學科ノ課程ヲ四週年トス最初ノ一年間ハ理學部生徒ノ修学スル処異同アルコトナシ其後年ニ至リ各別レテ專門ニ入ル左ノ如シ

化學科

土木工學科

機械工學科

地質学及金石学科

採鑛学及冶金学科

數學物理學及星学科

生物學科

文學部ヲ分テ二課程トス全四週年間修学スルモノ左ノ如シ

和文及漢文學科

英文学科

第二　生徒ノ分類

如何ナル家屋造営ガ各学科ニ於テ要セラルヽカ便宜ノ為ニ假定ノ分類ヲナスコト左ノ如シ

毎年各級生徒百分ノ五ヲ減スル者トシ算用ス

		第一年	第二年	第三年	第四年
法學		六十	五十七	五十三	五十
文學	和文	三十	廿七	廿六	廿五
	漢文	六十	五十七	五十三	五十
理學	化学	二百	五十	四十七	四十五
	土木工学			廿三	廿二
			五十		
	機械工学			廿四	廿三
	地質学金石学				十八
			四十	三十八	
	採鑛学冶金学				十八
	生物学		廿五	廿三	廿二
	数学物理学星学		廿五	廿三	廿二

○法學部

本學部ニ於テハ重ニ講義ヲ以テ教導ス各級・生徒ノ員數ヲ算定シテ大略五十名トセバ其教場ノ大サハ該員數ヲ容ルヽニ足ルヲ要ス講義ヲ授クルニ寡少ナル級モアルヘシ故ニ随ヒテ狹少ナル室ノ一部ヲ設クルヲ可トス又大畧三百名ヲ容ルヽ一般會議ノ用ニ供スル一室モ無カ

ルヘカラス席室ノ須要ナルモノヲ左ニ擧ケン
講義室　四　大凡縦三十六尺横二十四尺
講義室　四　大凡縦三十尺横二十尺
會議室　一　大凡縦六十尺横五十尺
教授扣室二乃至三　大凡縦十尺横十尺
外来者應接室　一　縦二十尺横二十尺
教授待合室　一　縦二十尺横二十尺
校僕室　一　縦十五尺横十五尺
他ノ家屋ニ先テ法学及文学部ノ家屋ヲ建築スルニ当テ一時ノ備トシテ大略洋書五千部和籍三千部ヲ受容スヘキ図書室其他閲覧室等ヲ設クルヲ要ス前ニ呈進シタル大略按ニ計畫シタル席室ノ二三ハ此一時ノ用ニ供センカ為ナリ
最初ハ生徒ノ員数甚タ多カラサルヘキカ故ニ講義室ヲ此等ノ用ニ供シテ可ナリ

○文學部

本學部ヲ分テ二科トス英文學科及和漢文学科是ナリ
英文学科ニ於テハ毎級大畧五十名トシ四級和漢文学科ニハ生徒ノ員数前条ニ半シ四級ト見做シテ左ノ席室ヲ要スヘシ
級室（クラスルーム）　五　各大畧縦三十六尺横二十四尺
同　四　各大畧縦三十尺横二十尺
應接所一　大畧縦二十尺横二十尺
教授扣所（小ナルモノ）二三　縦十尺横十尺

教授待合室一縦二十尺横二十四尺

校僕室一

建白スルカ如ク法学部ト文学部ト家屋ヲ連接セシメハ彼ノ一時設置ノ図書室及閲覧室ハ両部共用スヘシ又時ニ臨テハ相互ニ席室ヲ使用スルヿアルヘシ是法学文学両部ノ建設畧図ヲ計畫セシ由縁ナリ

○理學部

化學科

本學科ハ左ノ席室ヲ要ス

普通化學講義室 理学部第一年生徒五十台ノ使用ニ適スル

教授用実驗室 上條ノ室ニ隣接シテ化学ノ用意等ニ使用スル

換質化學用分折実驗室 四十乃至五十台ノ生徒ヲ容ルヽ

藥品藏室教授室クローク室等附属セシムヘシ

定量分折用実驗室 四十乃至五十台ノ生徒ヲ容ルヽ

藥品藏室機械室硫術室顕微鏡室教授室等附属セシムベシ

有機分折実驗室 十五名ノ生徒ヲ容ルヽ

量光及スペクトロスコピック室 暗黒ニナシ得ルヲ要ス窓ヲ要セス

上級講義室 稍高進シタル業ヲ執ルニ用ユルモノニシテ五十名ノ生徒ヲ容ルヽ須備室ヲ附属セシムヘシ

土木工學及機械工学科

本学科ハ土木工学教授及機械工学教授ガ画学數學等ノ教員及助手ト共ニ教導スルカ故ニ左ノ席室ヲ要ス

土木工學教授用講義室　大凡縱二十四尺横三十六尺狹小ナル教授室ヲ附属セシム大畧縱十尺横十尺

土木工學教授用画学室　善ク光線ノ入ルモノニシテ大畧二十五名ノ生徒ヲ容ル、

機械工学教授用講義室縱二十四尺横三十尺

機械工学教授用画学室　善ク光線ノ通スルモノニシテ二十五名ノ生徒ヲ容ル、私室（プライベートルーム）ヲ附属セシム縱十尺横十尺

純正數学講義室　生徒五十名ヲ容ル、縱二十四尺横三十尺

應用數学講義室　生徒三十名ヲ容ル、縱二十四尺横三十尺

普通画学用廣堂（ラージホール）　善ク光線ヲ通シ五十名ノ生徒ヲ容ル、

両学科教授上ニ使用スル機械模型ノ用ニ供スル廣堂　工学教授講義室ヨリ易ク出入シ得ル　大略縱三十尺横六十尺

物質強弱試驗室

工學作工場（ウオルクジョップ）ヲ建築スルトキ此中ニ試換室ヲ設置スヘシ

機械工学工作場

○地質學及金石學科

理學第一年生徒ハ地質学教授ノ講義ニ出臨スルヲ以テ該講義室ハ廣大ナルヲ要ス

本學科ノ講義室ニ於テ地質学古生物学及金石學ノ蒐集品（コルレクション）ヲ使用スルノ便アルニ因リテ該講義室ヲ博物（ミュージアム）列品堂（ビルジング）ヲ置クヲ可トス

左ノ席室ヲ要ス

蒐集品ニ隣接セシメ大略七十名ノ生徒ヲ容ルヘキ廣大ナル講義室

教授私室　大凡縦十五尺横十五尺
模型、鑛石、書籍等ノ室縦二十尺横二十尺
蒐集品ノ室ニ至テハ（博物列品堂）ノ部ヲ見ルべシ

採鑛学及冶金学科

採鑛学及冶金学講義室　七十名ノ生徒ヲ容ル、
計画地図採鑛地中測量等用室　容四十名ノ生徒ヲ
採鑛学教授私室縦十五尺横十五尺
助手室縦十五尺横十五尺
器具蔵室縦十尺横二十尺

冶金学実験室　四十名ノ生徒ヲ容ル、　二千尺
金属等ヲ飾整スル室　二千五百尺
役局　二百尺
金属蔵室　二百五十尺
器具蔵室　百尺
模型書籍等ノ室　二百尺
秤量室（バランスローム）　百尺

試金室（アスセイング）（乾法）　五百尺
試金室（湿法）　五百尺
秤量室　百尺
見本室（サンプルローム）　百五十尺
新蔵室　二百尺
薬品蔵室　百五十尺

役局　二百尺

生物學科

*動物學講義室　縦三十尺横三十尺

教授役局　縦十尺横十五尺

光線ヲ北方ヨリ執リ生徒三十名ヲ容ルべき動物学実験室　縦四十尺横三十尺

顕微鏡室　縦十五尺横二十尺

皆動物学上蒐集品室ト連接スルヲ要ス

植物学講義室　縦二十四尺横三十尺

教授役局　縦十尺横十五尺

植物ヲ准備スル室　縦二十四尺横三十尺

蒐集品等ノ諸室ハ博物列品堂中ニ設クベシ

*本室ハ座位ヲ桟敷ノ如ク組立テ教授ノ檯ハ善ク室内ニ置クヲ要ス

○數學物理学及星学

數学教室　生徒三十名ヲ入ルヽノ廣サトス

筭數物理学教室　同

普通物理学教室　生徒七十名ヲ入ルベシ但器械室ヘノ通路ヲ付クベシ

試験物理学教室　生徒二十五名ヲ入ルベシ但器械室ヘノ通路ヲ付クベシ

物理学実験室ハ左ノ諸室ヨリ成立ツ者トス

普通ノ試験等ニ用ユル室　縦七十二尺横三十六尺

特別ノ試験ニ用ユル室　縦三十六尺横二十四尺

教授ノ私室　縦十五尺横十五尺

顕微鏡実験室　縦十尺横十尺

分光器実験室　縦二十尺横十尺

ガルバニックバテリーヲ据置ク室　縦十尺横十尺

光線試験室　暗黒ニナシ得ル様作ルヘシ　縦二十尺横十尺

提擲及落降スル物ヲ試験スル楼　縦横十尺 高サ五十尺

物理実験室ハ試験机ノ石柱ヲ固フスルカ為メ楼下ニ設クルヲ好トス且ツ物理学ノ試験ハ日光ノ直射ヲ要スルモノ多キヲ以テ南側ニ設置スヘシ

星学教室　生徒三十名ヲ入ル

星学関スル図面及器械ノ為メ一隣室ヲ要ス　縦二十尺横二十尺

預備教室　都合ニヨリ用ユル者トス

書籍室

此書籍室ハ大学書籍室ノミナラス公衆縦覧ノ書籍室トスヘシ故ニ法理文学ノ諸書ヲ備置クヘシ然レ𪜈法学醫学而已ニ関スル書ハ別室ニ備フルモ可ナリ○書籍ハ生徒ノ用ニ共スル者最多キヲ以テ閲覧室ヲ廣大ナラシムルヲ要ス書籍室ハ医学部及ヒ諸学部ニ便ナルハ勿論公衆ノ為メニモ便ナル地ニ建設スヘシ

次ノ書籍ノ為ニ速ニ書室ヲ設クヘシ尤何程ニテモ之ヲ増設スルニ便ナラシムヘシ

法律書籍室　和漢洋

醫學書籍室　和漢洋

一般書籍室　和漢洋

書籍閲覧室

雑誌類　観者五十名
法律書　観者百名
醫学書　観者百五十名
普通ノ書　観者二百名

○博物室

本室ハ生徒教導ノ用タリト虽氏公衆ノ縦覧ヲ許スヘシ尤集品ハ教授上ニ要スル者ノミニシテ其他ハ除リ者ナリ故ニ此目途ヲ達スルカ為メ集品ノ増加ニ従ヒ室ノ内外共変更スルニ便ナラシムヘシ但シ現今要スル所左ノ如シ

(一)金石學及地質学

金石集品室　縦百尺横二十尺
地質集品室　縦百尺横二十尺
日本金石集品室　縦五十尺横二十尺
地質雛形集品室　縦三十尺横二十尺
博物室掛詰所諸見本ヲ處置スル場所トス　縦四十尺横二十尺

右諸室ニ接シ金石學及地質学ノ教室ヲ設クヘシ

(二)採鑛學及冶金學

採鑛雛形及諸産物ヲ備フル場　積二千方尺
冶金學ニ関スル雛形及産物ヲ備フル場　同

(三)動物學

鳥獣ノ見本ヲ備フル場　縦一百尺横三十尺即積三千五百方尺
諸獣骨類ヲ備フル場　縦五十尺横三十五尺積千七百五十方尺
無脊骨動物ノ為メ要スル場　縦八十尺横三十尺

人類学ヲ要スル場　積二千方尺

諸図画ノ為メニ要スル場　積二千五百方尺

右ノ外他ノ諸室ヲ加設スベシ

博物室ニ整列スル前ニ見本ヲ装製シ及ヒ貯畜スル室　縦四十尺横三十五尺

アルコール及氷ヲ蔵スル室　縦廿尺横廿尺

動物学集品室掛詰所　縦廿尺横廿尺

（四）植物学等

植物見本ヲ製スル室　縦三十五尺横三十尺

木材集品室　縦四十尺横三十五尺

諸産植物集品室　縦五十尺横三十五尺

種類及菓実ノ模型ヲ備フル室　縦三十五尺横廿尺

整列スルニ至ラサル植物ノ置場　縦四十尺横三十尺

植物ノ図画ヲ備フル室　縦二十尺横二十尺

（五）製造品

油類繪具染料

アルコール及酒類

蠟及パラフヰン等

陶器玻璃煉化石及瓦

護膜等

右諸品ヲ備フル場　縦五十尺横三十五尺

（六）醫科博物室（メヂカルミュジヤム）

大學醫学部及諸学部ノ書籍室及博物室ハ到底合併スヘキヲ期ス

醫科見本ノ為メ大凡要スヘキ者左ノ如シ

乾カサル見本ヲ備フル室　縦三十尺横三十五尺

乾キタル見本ヲ備ル室　縦三十五尺横三十尺

見本ヲ製スル室　縦三十五尺横三十尺

事務室（訳者曰右三室ヲ管理スル者ノ居ル処ナルヘシ）縦廿尺横廿尺

（七）諸官員等

タイラクトルス、ルーム室（二室）　縦十五尺横十尺　縦三十尺横廿尺

樓上應接室　縦三十尺横二十四尺

樓下應接室　同　同

讀書室　縦三十尺横二十四尺

校僕室　縦二十尺横十五尺

門守室　縦十五尺横十五尺

物置場數室

金石地質学集品ヲ樓下ニ置キ生物学集品ヲ樓上ニ備置クヘシ

○講義室

大學諸般ノ用ニ供スル為メ三千ノ坐客ヲ入ルヘキ一大集會室ヲ要ス且室内ニ一百人ヲ坐セシムヘキ高坐ヲ設クヘシ又高坐ニ續キ縦三十尺横二十五尺ノ應接室及衣服ヲ整フル等ノ為メ二室ヲ設クヘシ且ボールド圖面燈火ノ為ニ宜シク便ヲ謀ルヘシ」講義室ハ諸学部及公衆ノ為メ便宜ノ地ニ建設スヘシ

○大學事務室

大学事務ノ為メニ要スル諸室左ノ如シ

綜理室　縦三十尺横二十四尺

私室　縦十五尺横十尺

綜理補及記録掛室　縦三十尺横二十尺

公書ヲ藏スル小房　縦十尺横十尺

用度掛室　縦三十尺横二十四尺

營繕掛室　同　同

上等應接室　同　同

下等應接室　同　同

教授等ノ集會室　縦四十尺横三十尺

校僕室　縦十五尺横十五尺

右諸室ハ諸學部ヨリ来ルニ便ニシテ且他ヨリ来ル者モ容易ニ達スヘキノ場所ニ設クヘシ

○雑事ニ係ル注意

(一)温煖ヲ取ルヿ

廣大ナル家屋中夥多ノ教室等ニ温熱ヲ取リ人体ノ快キノミナラス大ニ費用ヲ節減シ得ヘキモノハ蒸気ヨリ好キハ無シ而シテ一個ノ蒸氣機関ニシテ諸室ヘ蒸気ヲ送ルヲ得ヘシ若シ不便ナラハ二箇ヲ用ユルモ妨ケナシトス

(二)燈火ノヿ

諸室中夜間心ラス用ユル者アルヘシ然レハ燈火ヲ要スルハ勿論又化学冶金学物理学等ノ実験室ニ於テ実験ノ為メ瓦斯ヲ要ス故ニ公私ヲ問ハス何レノ瓦斯局ヨリカ瓦斯ヲ引キ用ヒサルヘカラス

(三)博物室及書籍室

両室ノ如キハ次第ニ盛大ニ至ルヘキモノナルヲ以テ家屋モ随テ廣大ナラシメサルヲ得ス故ニ最初ハ一家屋ニ藏スルト虽盛大ナルニ従ヒ之ヲ分離シ各別家屋ニ貯藏スルモノトス

法學　二百二十人
文學　三百二十人
理學　七百二十三人
惣計千二百六十三人

學位稱號授與式手續

第一條
學位稱號品等ノ區別ハ學課ノ難易修学年限ノ長短等ヲ斟酌シ預シメ一定ノ規則ヲ設クヘシ
（假令ハ修学年限三年以下ノ者ハ得業士四五年以上ノ者ハ学士ノ稱ヲ與フル歟ノ類）

第二條
學位稱號授與ノ權ハ文部卿ヨリ大學ニ委任スル者トス

第三條
各大学ハ學位試問ノ委員ヲ撰擇シ試問ノ方法ヲ議定シテ文部卿ニ具申スヘシ

第四條

學位試問ハ卒業試問ト合シテナスベシ故ニ此試問ヲ経ル者ハ卒業試問ヲ受クルヲ要セズ但シ此試問及第セシ者ニハ學位ト卒業証書トニ葉ヲ授付ス

第五條

各大学ハ生徒試問ノ成績ヲ詳記シ學位ヲ授与スル者ノ姓名ヲ文部卿ニ関申スベシ文部卿ハ之ヲ認可シ内務省ト各学校ヘ報告スヘシ

第六條

學位ヲ有スル者事故ニ由リ管轄廳ハ其業（醫業）ヲ禁スルモ得ルモ學位ヲ褫奪スルノ權ナシトス

第七條

大學ニ於テ學位ヲ授付スルニハ必ズ其式場ヲ設ケ授受者共ニ禮服ヲ着シ一定ノ式ヲ以テ之レヲ授付スベシ文部卿以下客員トナリテ臨席スルコトアルベシ

第八條

學位ヲ受クル者式場ニ臨ンデ演説ス（學事上究明セシコト又ハ実驗経驗ノ諸説アル者ハ其要須ヲ抄出シテ演説ス尤預シメコレヲ筆記シテ試問委員ノ覧閲ヲ経ベシ）尋デ授付者祝文ヲ朗讀シ卒ツテ學位ヲ授ヅク受者又授付者及ビ客員ニ向ツテ謝辞ヲ演ブ

第九條

大學ノ學科課程ヲ（本部通学生ハ除ク）履行卒業セザル者ハ學位ヲ得ルノ權ナキ者トス然レモ教育或ハ

學事上著シキ功労アル者ニハ大學ニテコレヲ議定シ文部卿ニ具状シテ學位ヲ與フルヿアルベシ

卒業証書々式

族　　姓名　　年齢

何學卒業候事

卒業試問成績

何學　甲
同　乙
同　同
同　同

試問師

東京大學何學部教授

姓名

同

同

同

同

東京大學何學部之印

年 何號 月 日

東京大學何學部綜理 位 姓名 印

何某素行矩アリ勤學倦マス正ニ定期ヲ履テ何學科ヲ卒ヘ考試皆完シ因テ今余カ負任スル所ノ權ニ仗リ斯ニ何学士ノ學位ヲ授ク爾後之ニ屬スル優待令擧ハ永ク享有シテ失フヿ無カル可シ乃右証トシテ本部ノ印章ヲ鈐シ余カ氏名ヲ署ス

明治十一年 月 日

東京大學何學部 綜理 何某 印

綜理ノ申稟ヲ領シ尚本省ノ國章ヲ押シ余カ氏名ヲ署シテ之ヲ証ス

文部卿 何某 印

舊加賀邸ニ後来東京大学全部合併ニツキ
醫學部ノ處置
醫學部科ノ課程ヲ五週年トス其学科ヲ大區スレバ左ノ如シ
觧剖學
生理学
病理学
藥剤学
内科学
外科学
眼科学
産科学
現今ノ預科生ノ如キハ原来中学ノ學科ニシテ

從来大学ヨリ分カツベキ者ナレバ爰ニ記載セズ亦物理学化学植物学動物学鑛物学及數学ノ諸科ハ從来理学部ニ属スベキ者ナレバ同部ト協議シテ席室員數廣袤ヲ定メテ同部ニ嘱托セリ觧剖学生理学病理学及藥剤学ノ四科ハ屍体觧剖或ハ獸類ニ試験ヲ施シ或ハ化学的ノ試験ヲ要スルガ故十全ヲ期スル片ハ此四科ニ向ツテ少ナクモ三箇ノ獨立ノ建築ヲナサヾルヘカラズ故ニ別ニ後條ニ記載ス

内科外科産科眼科ノ如リ臨床講義ヲ要スル諸科ハ別ニ病院ヲ建設セサルベカラズ然レ氏此諸科ニ属スル講義室ハ學校内ニ設ケサルヲ得ザル者アリ

學校内ニ講義室ヲ要スル諸科ノ細目ヲ左ニ枚擧ス

普通觧剖学	局処觧剖学
組織学	胎生学
生理総論	生理各論
藥剤学	病理総論
病理各論	内科学
外科総論	外科各論
外科手術学	繃帯学
眼科	婦人科
小児科	診断学
耳科	歯科

皮膚病　梅毒
咽喉科　中毒学
醫科地理誌　醫学歴史
瘋癲科　断訟医学
衛生学

右ノ諸科中獨立学校又ハ醫院中ニテ講義ス・ベキ者モ少ナカラズ然レ氏大約預備室共ニテ十二箇ノ講義室ヲ要スベシ

現今ノ本科生ハ一級六十名ヲ限リトスレ氏後来一級百五十名ヨリ少ナカラザルヲ期ス

大学事務室講義室及書籍室博物室等ノ如キ都テ四学部普通ノ者ハ別ニ記載セス

左ニ単ニ醫学部ニ要スル所ノ席室ヲ掲載ス

室名	数	寸法
醫學諸科講義室	十二	生徒百五十名ヲ入ルヽ席トス
醫学會議室	一	縦六十尺 横四十二尺
應接室	一	縦二十四尺 横三十尺
教授私室	二	縦二十四尺 横三十尺
事務室	一	縦二十四尺 横十八尺
生徒休憩室	一	縦四十二尺 横三十六尺
講義用書籍室	一	縦三十六尺 横四十二尺
全器械室	一	縦二十四尺 横十八尺
校僕室	一	縦二十四尺 横十八尺
宿直室	一	縦十五尺 横十八尺

獨立ノ建築ヲ要スル學校

第一生理學校兼病体解剖場

室名	数	寸法
講義室	一	縦四十八尺 横四十二尺

室名	数	縦	横	備考
顕微鏡室	一	二十四尺	六十尺	
化學試験室	一	四十八尺	四十八尺	
活体解剖室	一	四十二尺	三十六尺	
キモグラヒヨン室	一	四十八尺	二十四尺	
畜獣室	一	二十四尺	三十六尺	
暗室	一	十六尺	三十尺	
教場器械室	一	三十尺	十八尺	
教授室	二	三十尺	二十四尺	
病理学教場	一	四十八尺	四十二尺	
病体解剖室	一	四十二尺	三十六尺	
側室	一	三十尺	十八尺	
屍室	一	二十四尺	三十六尺	
解剖器械室	一	十六尺	三十尺	

第二解剖學校

室名	数	縦	横	備考
講義室	一	四十八尺	四十二尺	床下ヘ屍室ヲ設ク
解剖室	一	六十尺	四十八尺	
教場用プレパラート装置室	一	三十二尺	三十五尺	
顕微鏡室	一	三十二尺	五十六尺	
寫真室	一	二十二尺	二十四尺	
教授私室	二	二十二尺	二十二尺	
仝	一	二十二尺	二十四尺	
教場器械室	一	二十二尺	二十二尺	
教場書籍室	一	十尺	二十二尺	
生徒休憩所	一	三十五尺	三十五尺	床下ヘ屍体洗滌及注射ノ室ヲ設ク
校僕室	一	十八尺	十八尺	
骨格鍛錬室	一	二十二尺	二十二尺	

第三藥劑學校

室名	數	縦	横
講義室	一	四十八尺	四十二尺
教授私室	二	二十四尺	二十四尺
化學試驗室	二	四十八尺	三十六尺
動物試驗室	一	三十六尺	三十尺
顯微鏡室	一	二十尺	三十尺
藥品儲藏室	一	三十尺	四十二尺
器械儲藏室	一	三十尺	四十二尺
秤量室	一	十八尺	二十四尺
容量室	一	十八尺	二十八尺
畜獸室	一	二十四尺	三十六尺
校僕室	一	十八尺	十八尺

右ノ外醫院ノ廣袤ハ畧ス